

勝鬘經の流傳とその教理史的地位

成 田 貞 寛

佛敎の根本原理が緣起法にあることは言ふまでもない。これを根據として、有情數と一切法因緣生との緣起に分れ、前者から唯心論、後者より實相論が生じたとされる。後世これを敎式的に見るとき、實相論系を辿るものとしては中觀派があげられ、唯心論系を辿るものとしては瑜伽行派があげられる。しかも兩者は共に夫々の立場があり、従つてその主張點を異にすることもあるが、後者は前者の主張を承けて、それを正當に發展せしめると共に、前者の未だ説き及ばなかつた重要な點を併せ主張したと見るべきである。大乘の諸經典はこの二大敎系に攝取され、影響を及ぼすことによつてその意義を持つ。換言すれば二大敎系は大乘の諸經典を所依とすることによつて、成立し發展し來れるのである。然し嚴密に言へば、この二系統に直接關係しなかつたは多く大乘の諸經典があつたに相異なく、兩系の中間的のものもあれば、兩者を辨證止揚すとされる經典も表れたであらう。勝鬘經はおそらくこれに相當するものではなからうか。これを支那佛敎の敎判論に徴するに、慧觀、智藏、法雲等の立つる三敎五時判に於ては、この經典を偏方不定敎の中におさめ、頓漸の化儀に關らず、別して一緣の機のために佛性常住の理を説くものとして、最高の地位に置き、賢首大師法藏の四宗判に於ては、この經典を楞伽、密嚴、起信、寶性の諸經論と共に第四如來藏緣起宗におさめて、中觀、瑜伽の諸經論の上位に置く。即ちその間の消息を物語るものではあるまいか。

勝鬘經は西紀二世紀頃に創作されたものである。その思想内容は豊富にして、觀點の差によつてその見方も異つて来るが、二大教系的に立論すれば、如來藏説を説くものとして唯心論系を辿るものとされる。如來藏の語は勝鬘經によつて始めて語られる所にして、その思想内容は既に部派佛敎に於て、大衆部、分別部、上座部（錫蘭）の心性本淨説にその源を發してゐると見られる。その後初期大乘經典に於ては佛種の語を以て説かれ、更に佛性と呼ばれる様になつたが、般若經に於ては更にこれに理論的根據をあたへ、智度論によれば、「非情數にあるを法性と云ひ、有情數にあるを佛性と名づく」と言ふに至り、万法はその眞如に於て同性同体であり、佛凡も一体であると主張するに至る。これに次いで勝鬘經等がこれを如來藏の語を以て呼ぶ様になつたものである。その思想發展の跡を見るならば種々の問題があり、佛陀觀發達の考察も加へ考へられる。部派佛敎に於ては、その心体は迷妄の主体として説かれて、未だ迷悟兩面の主体としては説かれず、初期大藏經典の佛性佛種の説は法身涅槃への向上的方面は説かれても、未だ煩惱生死の所依となる方面は説かれなかつた。有情數緣起の理を主体的に把握する所に勝鬘經の如來藏の説が生れたと思はれる。さて經典には現實の生死と如來藏との關係を説いて、

世尊、生死者依_レ如來藏_一。以_レ如來藏_一故、説_レ本際不可知_一。世尊、有_レ如來藏_一故、説_レ生死_一。是名_レ善説_一。……非_レ如來藏有_レ生有_レ死_一。如來藏離_レ有爲相_一。如來藏常住不變、……世尊、若無_レ如來藏_一者、不_レ得_レ壓_レ苦樂_一求涅槃_一。と言ふ。即ち生死流轉は時間的存在であり、如來藏は時間的存在ならざるものである。時間的存在は時間的ならざるものを俟つて初めて時間的存在たり得る。即ち時間的存在を基礎づけるものは時間的存在であつてはならぬ。本際不可知とは、その起源は無窮の過去にあつて知ることが出来ないと言ふのではなくして、むしろ生死を基礎づけるものは時間的存在でない。従つて時間的にその起源を尋ねることは不可能であるとの意である。更に他面よりこれを見れば、生死は闇であり、如來藏は闇に蔽はれたる光である。闇の存在を知らしむるものは光である。即ち闇は光に照らされて初め

てあり得るものである。光に照らし出されたるものがその本源である光を知ることとは不可能である。これ又經に、本際不可知と説かれる所以であらう。かくの如く生死は如來藏に依るとは、生死を可能ならしむるものは如來藏であるとの意味である。かく生死流轉は闇であり、如來藏は闇を照らす光であると共に闇に内在する光である、闇は光に照らし出されて初めて闇であり得る。従つて闇を破る力は闇自身から出てくるものではなくして、光が闇を通して働き出すことでなければならぬ。更にこれを言へば、光が闇を通して光自身に還ることではなければならぬ。これを示すものが經文の「若し如來藏無くば、苦を壓ひ涅槃を樂求することを得ず」であらう。かくの如く生死は如來藏に照らし出されて初めて生死であり、然かも如來藏は生死のいづれにも内在するものである。然しながら生死はあくまでも生滅流轉の有爲であり、如來藏は生滅變化なき無爲である。然らば無爲である如來藏が如何にして有爲の生死の所依たり得るか。この疑問に對しては、一が無爲であり他有爲であつて二者その次元を異にすればこそ、却つて一が他の所依たり得ると答へ得る。二者その次元を異にすればこそ、その二者の間に包攝關係が成立するのであり、若し二者その次元を同じくするならば、一が他を包み得る關係は成立し得るも、他が一を包む關係は成立し得ない。如來藏が無爲であり、生死が有爲であればこそ、如來藏に照らし出されて初めて生死たり得るところの生死がよく如來藏を包み得るのである。従つて如來藏は生死を照らす一面よりは自性清淨と言はれ、生死に内在し生死と隔別ならざる一面よりは清淨ならずと言ひ得る。清淨ならずと言ふと雖も、決して清淨を失ふと言ふ意味ではない。むしろ清淨にして清淨でないと言ふ意味である。經はこれを説いて、「此自性清淨如來藏、而客塵煩惱所染不思議如來境界。……自性清淨心而有染者、難可了知」。唯佛世尊實眼、實智、爲三法根本……。如實知見。」と述べてゐる。以上この經典の如來藏說の大略を述べたが、馬鳴の著、起信論に於ては、その心生滅門に更に組織的に論述し、堅慧の究竟一乘實性論、大乘法界無差別論等何れも、この經典の文を引用して敷演してゐる。世親に於ては既に勝鬘經論ありと傳へられ、その著佛性論の

如來藏品には、所攝藏、隱覆藏、能攝藏の三義を以て如來藏を詳論し、辨相分等にもその義を高調してゐる。彼の學說中、何れが究極のものであるか、多岐多端に涉る故にそれが把握に困難であるが、その何れの學說を理解する上に於ても、佛性論の説が中心をなすものであると考ふる限り、彼のこの説が他を統括すべきであり、勝鬘經の彼の教學に於ける地位を知るべきである。更にまた無上依經、楞伽經の經典すらこの經典の思想を源流として成立したと思はれるから、當時既に盛んに喧傳研究され、經典中の經典として相當な地位を占めると共に、佛教思想史の一段階をなしたものと考へられる。

西紀四三六年、初めて求那跋陀羅によつて支那の地に翻譯せられ、更にその後菩提流支によつて改譯（前代のもの）さるゝに至る。その西藏譯は西曆第九世紀、徠巴膽王の代（八六六—九〇一）、印度の論師 Jina mitra, Surendra bo-dhi と大翻譯官 *ve. sis. ste* 師とによつて、翻譯の洗練と譯語の統一とを以つて翻譯、校訂、刊定せられたりと言ふ。これが支那の地に翻譯さるゝや、忽ちにして多くの師によつて講説と注疏とが行はれ、僅か數十年を出でずして全く支那の南北を風靡せしことは、古來稀なること、言はなければならぬ。現存する注疏、僅か嘉祥の寶窟三卷、慧遠の義記卷上、慈恩の述記二卷、其の他敦煌出土の注疏三部にすぎざれども、支那の佛教々學に及ぼせる影響は大なりと言ふべきである。我が國に於ては佛教公傳後、間もなく聖德太子によりて講讀せられ、勝鬘經義疏一卷として著さる。然もその注疏は、經の趣意を明快且つ的確に把握せるものとして、當時多くの人師に依つて稱讚せられ、既に普寂の言へる如く、藏性の體義を究め、權實の幽蹟を探ぐる最高の指南として、太子教學の精髓をなしてゐる。さればこの經典が、日本文化創業の指導原理となりたる貴重なる寶典であるは論ずるまでもない。かくこの經典が佛教有縁の各地を靡かせ、その一大思想の源泉をなしたと言ふことは、實に比類なきことで、全くこの經典の表現の巧緻とその思想内容の理の深さによるものである。寶窟はその總序に於て、

「此の經は言約にして義富めり。事遠くして理深し。豈たゞ勝鬘の一經のみならん。乃ち總じて方等の宗要なり。余翫味既に重ね、遂鑽年を累ぬ。古今を捫拾し、經論を搜檢して、其の文玄を撰び、勅して三軸と成す」。

と述べてゐる。以てその意を知ることが出来る。華嚴維摩の精英を汲み、法華涅槃の宗極を談ずるこの經典が、三國佛敎々學の基調となり、中觀瑜伽の二系統を止揚する如來藏系統として、別立の源をなす所以である。

(終)